

# トワイライト氏のとある一日

(囁る子供たち)

「ねえー。小夜啼鳥さよなきどり。そろそろ友達になつてよ」

「私は別に……友達なんて欲しくはない。そもそも、そんなもの作るということに関して、御母様ママが許可するかどうかともわからない。つまりは色良い返事を期待するだけ愚かな質問ね」

蜂蜜ミツバチつきのバタートーストとチェリーパイとローストターキー、そしてなにかの果物を混ぜたような奇妙な味のする飲み物（不可解だが不味くはない）に、お茶請けは木苺いちじくと漬物ヅケというんだかよくわからないもてなしを受けながらナイチンゲールは素っ気なく応じた。すでに何度か繰り返された要求であり、却下も同じ数だけ行った。しかし梟ふたぎはめげない。断られたことを次の瞬間には忘却しているのかもしれない。諦め悪く会うたび何度もそう求めてくる。

「私は友達欲しいんだよお。女の子の友達いないしさあ。あと井戸のは今何か関係あるか？」

不思議そうな顔をしてそう語る若い女は、こちらよりはいくらか歳上に見えた。だが表情は異様に幼い。そしてなにも着ていない。誰も文句は言うまい。

彼女を語る上で、美醜ひびくについて雑な区分けをするなら、とりあえず絶世の美女というカテゴリーを作つてそこに放り込んでおけばいい。誰も文句は言うまい。

淑やかに黙つて座っている限り、と但し書きをつける必要さえない。行くところまで達してしまえば美しいものはなにをどうしていたところで美しいのだ。例えば大口を開けて笑い転げていたり、

突如魚の掴み取りを始めたり顔中に枯葉混じりの蜘蛛くもの巣を絡めていたとしても。

悔しいが、その造形に何らかの難点を指摘することは非常に難しかった。ここは際立って美しい姿をしたその幼稚な女の棲家である。木々に覆われた崖の中腹にある巨大な岩窟。羽のない者が訪れるための便宜か、年季の入った繩梯子なわぼしこが入口から下がっている。登るたび、引きちぎれはしないかとナイチンゲールは内心恐々きょうきょうとしている。

梟ふたぎはナイチンゲールにも脱げ脱げと勧め、積極的にスカートを捲めくつたり色々やってくれたが、とりあえず妥協点としてこちらも靴と靴下を脱いで裸足はだしになっていた。足を投げ出して彼女が座ると、梟ふたぎは真似をして向かいに座り、足の裏同士をべたべた合わせてきて笑った。明らかになんの意味もない行動で不可解だったが、相手は非常に楽しげではあった。

ナイチンゲールはつまらなそうに問うた。

「御母様ママとは友達にならないの？」

「んー。あれは、友達なのかなあ。なんかよくわかんない」

「まあ、よくわかんない人よね」

「だろー！」

首を捻ひねる梟ふたぎに溜息を返して、ナイチンゲールが言うと彼女は嬉しそうに応じた。

机や椅子といった家具はないので、ふたりとも色鮮やかな織物の上に直接座っている。年経たように見える風合いだだが、色褪あせ

ない不思議な手触り。皿や湯呑みもそこに置いてあった。敷物はふかふかしており座り心地は悪くなく、ここは自分の癖だからどんな座り方をしてもいいのだと梶は気楽な調子で主張した。そして実際、好き勝手に寝そべったり胡座をかいたりする。

だからナイチンゲールも思い切り膝を崩して座っていた。ワンピースの裾が捲れてシユミーズだのドロワーズだのが露わになっても、まあいいかと思える雰囲気は確かに漂う居心地の良い空間だった。

壁と天井にぼんやりとした象牙色の光がいくつも浮かび、やわらかく周囲を照らしている。なんらかの魔術的な光源であることは間違いなかった。光を放つ中心を見つめても目に痛みを覚えないう。月光を思わせる、しかし温かみのある灯り。

洞窟は奥深くどこまでも続くようで、灯りが点いているのは入り口から今自分たちがいるあたりまで。そこからしばらく奥へ進むと、ふつりと空間ごと途切れるように暗闇が広がる。視線で辿るだけだが、必要ならば奥も明るくなるのだろうかと予測する。近付けば勝手に灯るのかもしれない。梶は蝙蝠と違い、完全な暗闇ではものが見えないからだ。

相手の形のよい鼻梁に洞窟内の仄かな光が反射して、内側から燐光を放っているように見える。それを見るときもなしに眺めながら、ナイチンゲールは皮肉げに呟く。

「御母様はあなたのこと好きみたいよ。捕まえて剥製にしようと思ってるかもね。そして私が毎日埃を払うことになるのかし

ら。お互い御愁傷様ね」

「剥製はいやだ！私はチビが好きだよ」

その呼び名は要するに、子犬が必ず成長することを考えに入れず付けてしまった類のものにしか思えず滑稽なのだが、確かな愛着と抱擁感のようなものは感じられる。百回は繰り返されたその主張も含めてどこか面映ゆい気もするが、相手はいつもながら、なにも気にしていないらしかった。

「御母様にそう伝えるわ」

「よく言っておいて！」

梶は小首を傾げてにっこりする。自分を良く見せようとか、相手へのなんらかの駆け引きとか、そんなことは一切意識しない表情で。そのまま顔を近づけてくる。

「ねえ、お前はチビのことどう思う？」

寄せられた分だけナイチンゲールは顎を引き首を引っ込める。なるだけ感じ悪そうに振舞ったが梶は気に留めない。

問われて、仕方なく、ナイチンゲールは彼のことをいくつか思い出してみた。

——ひよろつとした体格の、長身の男だ。手足が長く細いので螻蛄みたいな印象を受ける。いつも長い脚を持って余すまいに椅子にだらしなく座る。肌は青白く痩せぎすだが、虚弱そうな雰囲気は意外と、なかった。醸すのは体躯か、造作か、あるいは仕草なのか。なにか鋭く硬質なものを思わせる。それはおそらく刃だ。歪みのない真っ直ぐな刀身をナイチンゲールは想像する。

錆びなくよく手入れされたナイフのようなもの。片刃ではなく両刃。切り裂くよりも突き刺すことに適した構造。刃渡りは二十センチに満たない。それだけあれば、十分に心臓を狙えるからだ。最短距離から穿てばそれでいい。

直視すればそんなものを想起させる割には、呑気そうな青年だった。世話焼きかつ使いっ走り根性が染み付いておりしかし生意気で軛んでも断じてただでは起きない。そう、世話焼きで生意気。それにつきる。歳は大して変わらないように見えるくせに、やたらとこちらの事を子供扱いしてくる気がして腑に落ちない。まあ確かに多少は歳上だが、自分だつて子供みたいな顔をしているくせに。少々背が高いからといって調子に乗っている。ナイチンゲールは想像上の彼の向こう脛を蹴り飛ばした。

ちなみにちようどイドと同じくらいの背丈なので、なんとなく話しやすいような気がしなくもない。慣れというのははきつとそうつたものなのだ。

「どうして？」  
胸の中に簡条書きで特徴を書き出しつつ、無表情に尋ね返すが梟は上機嫌を崩さない。首を突き出したままにこにこして肩を揺する。ほつそりとしたそれを白い髪がマントのように覆っている。

普段——普段？——は服の中に入れてある長い髪は床の上でしなやかにとぐるを巻いていた。癖のないその髪を音のない滝のように滑らせる、肩から腕にかけてのラインは大理石の彫像めいてまるやかだ。それも稀代の才有る者が削り出した、永遠の生

命を宿す石像。儂げにも見える造形でありながら、彼女の肉体の各部位はひとつひとつ、確かな存在感を持って空間に在る。そこには傷ひとつない。確かになにかを恥じたり、隠したりする必要はないのかもしれない。

美しい女は子供っぽい笑顔で子供っぽい質問を続ける。

「いいやつだと思わない？ かつこいいだろ？ 好き？ 嫌い？」

恰好いいかどうか。なるべく私情は挟まず客観的に考えてみようとなイチンゲールは記憶の検索を続ける。

鮫だとか狼だとか、とにかく噛みつく生き物の顔をしている。

痩せて鋭い造作。そろつと牙が生え揃った口元は確かに一見物騒に思える。

だが、よく見れば顔立ちそのものは案外まずくない。いつもどこか拗ねたような雰囲気の間だが、紺碧色をした両目は澄んでいて快活な印象だった。

愛想はいい。良すぎて胡散臭い。イドも相当だが、口から出任

せに調子のいいことはかり喋りまくる。にこつとすると、右側にだけ笑窪ができる。尖った面差しに反して、愛嬌のある表情で人懐こそうに笑う。常日頃強かそうに振舞ってはいるが、ふとした拍子に、思いがけずはにかんだような仕草を見せることもあった。本人が気付いているのか否かは知らない。なんにせよその時の様子を見れば暴力的な人間だとは考えにくく、実は意外と内向的で物静かな性格なのではないかと思うこともある。

傷だの痣だの色々あるが、見慣れてしまえば決して醜い容姿で

はなかつた。ただ本人は気にしているようだ。ふたりだけで室内に  
いるときは絶対に出入り口付近には立たないし、不用意にこち  
らの身体に触れることもしない。なにもかもさりげないが確かに  
気遣われている。もし恐怖を感じたならばいつでも逃げ出せるよ  
うにと。それは対峙する相手だけでなく、なにより自分自身を傷  
付けないよう、そうしているのかもしれない。臆病で繊細。  
研がれた刃物というのは、そういう性質も持つ。すべての印象は  
矛盾しない。

そんな風に、粗雑なようで実は注意深い男だった。頭の中にメ  
モ帳を持っていて素早くそこに色々なものを書きつけていく。見  
ていないふりをして見るのが得意だとイドが忌々しげに言ってい  
たことを思い出す。無遠慮に注視されて不快な思いをした覚えは  
確かに、なかつた。優れた嘘つきは目の動きを自由に、あるいは  
無意識的に抑えることができるというが。確かに彼にはその才能  
があるのかもしれない。

それを真似るよう、表情は変えないまま、ナイチンゲールは鼻  
先で嘆息した。

「そんなこと私に聞いてどうするわけ」  
「他人から見てもいいやつだつてどこ知れたかった。褒められて  
るとこ聞きたい。いいやつだろ？」

彼について褒めるべき点。なにがあるだろうか。引き続きナイ  
チンゲールは考えた。黙りこまないよう注意しながら。

すぐ思いつく点として、清潔でまめ。整頓好きだが他人に強要

しないので、神経質な印象がないのは悪いところではない。食器  
や道具類はきちんと種別に分けて揃えてある。

その割りに、ピアスの穴が左右不揃いに複数あるが、耳が大き  
いのでたくさん開けないと損だと思っただろうか。必ずし  
もシンメトリーを好むわけでもないらしい。彼なりのバランスな  
のかもしれない。

それは決して不似合ではないが、男のピアスは基本的に不  
良っぽい。髪が長かったり染めてあったり、その辺りも含めてちや  
らちやらして見える。私服はいつも地味なものを着ているが。

本人が選んで身に着けるのは大体無彩色だが、もしなにか見立  
ててやるのなら、赤よりは青、金よりは銀が似合う。その印象  
に違わず、目立たない銀のネックレスがいつも服の中にかかつて  
いる。母親の形見。あと、ナイフの類を必ずどこかに隠している。  
必要だと判断すれば躊躇なく抜くし、刺すなり斬るなり投げるな  
り、使用についても躊躇わない。化物相手には手加減すればこつ  
ちが死ぬので先手必勝で殺すしかないのだと前に言っていた。

確かに、取り立てて屈強な男ではないのだろう。身体的にも技  
量的にも。それなりの要領というか、遣り方を心得ているだけで。  
本領は別なところにある。

とにかく口が達者なのだ。ときどきあのイドをこてんぱんにや  
り込めているのには驚く。まさかそんなことがあるわけがないの  
だが、あのふたりは遠縁でもあるのではないかと疑う瞬間が時折  
頭を訪れる。叔母と甥とか、そんなものだっただろうか。そ

れくらいよく口が回る。あれこれ隠し芸の多い男だが結局のところは喋るのが一番得意なのだろうと思う。

なにより声に特徴があった。よく通り優しげな響きで、印象的な声音だ。それに色々声色を使い分け、滑舌長く緩急つけて喋るので聞き取りやすい。男としてはやや高めできれいな声をしており歌もうまい。声の持つ説得力という点を差し引いたとしても(天賦について、不公平を論じるのも無為だが)、なおイドとの違いがあるとしたら、ある程度明確な落ちを意識して話しているかどうかではないかとナイチンゲールは睨んでいる。彼女が面白いと思つて話すことはだいたい面白くないが彼の話はそれなりに評価できることもあつた。

本が好きで頭の中にたくさん物語を仕舞つている。記憶の本棚に綺麗に並べているのだろう。大きき別ジャンル別作者別。ななであれ目録や索引をつけて大事にしているに違いない。即興で自分で筋書きを作ること得意のようだ。それを書き記したりはしないのだろうか。気恥ずかしいとも思うのだろうか。ある程度のもので書くだけの能力は持つていそうなのだが、やつてみればいいのに。

——そういつた調子で、見たところ大体なんでも器用にこなす男なのだがとにかくいつでもへらへらしている。あとちゃらい。そしてすぐ女の陰に隠れる。事あるごとにかなり躊躇いなく鼻を頼る。従つてどうにも胡散臭いというか、頼り甲斐はない。

さらに思い返せば。昼間から平気な顔をして酒を飲む。ほぼ水

代わりだ。酒ならとりあえずなんでもいいようだが、特に赤ワインを好む。寒い時期ならスパイスと甘味を入れて温めたものをナイチンゲールにも出してくれる。悪い味ではない。本人はなにをどれだけ飲んでも酔つた様子はなく、ザルもいいところ。このあたりも非常に駄目な感じがする。そもそも仕事をしていない。昼まで寝ていてイカサマ賭博で糊口を凌いでいる。駄目だ、かなり駄目な人種だ。そして鼻のヒモ。

寝るるところを探そうと思つたのだがあまり良い着地点にならなかつた。そして結局かなり黙り込んでしまったことに気づきつつも、熟考の末ナイチンゲールはもう一度嘆息し、目を閉じて言つた。声音は自然と、軽く呆れの調子を含んだ。

「……悪人だとは思わない。お人好しのお節介だとは思うけど」

「それはつまりいいやつでとてもかっこいいってこと？」

「そうは言つてない」

脈絡のない結論を出したがる鼻を冷たくあしらつたのだが彼女はへこたれなかつた。そもそも男にも気にしていない。実のところかなりきついことを言つても愉快そうに笑うだけだとナイチンゲールは最近把握してきていた。

「私はチビ大好きなんだけど、お前もチビが好き？」

「その質問への答えは、好きだとあなたは嬉しいの嫌なの？そもそも、それは愛してるかって意味？」

「愛してるよ！私たちは愛し合つてる。それはもうね！愛し合つてるわけ。だって私はチビの奥さんなんだよ」

愛している。愛し合っている。この娘の口から出てくれば、それこそ子供めいて聞こえて重みのない言葉だった。大好きの方が適切というか、実感があるように聞こえる。しかし梟はそう言っ得意げに裸の胸を張る。鳥のくせにちゃんと臍がある。やわらかい膨らみから健康的に引き締まったウエストまでなだらかに続く曲線を眺めて、ナイチンゲールは懐疑的に呟く。

「それなんだけど、本当に結婚してるのかしら。口先だけの子供のごっこ遊びじゃないの？」

「してるよ。確かに結婚してる！でも詳しくはお前には教えられない、なぜならこれはふたりの間の重大な秘密だから！」

梟は言いたくて堪らないのだが残念なことにこればかりは言えないという顔つきで宣言し、まったく無意味に頭から寝床へとダイブした。そこにはふかふかとした綿が敷き詰めてあり、やわらかい匂いがした。ナイチンゲールも幾度となくちよつと試しに寝てみることを勧められたのだが、人の家にお呼ばれてまで昼寝をするのはどうかと思つたので断り続けている。

ふんわり寝綿に受け止められてうつ伏せに寝そべる梟の肌は白い。あまりにも白い。甘味を溶かしたやわらかいミルクの色をして、まるで陶器のようだが触れば温かい。綿を掬ってこちらへと投げつけてくるのを厭しつづ、ナイチンゲールは思いついたことを口にする。

「指輪を見せて」

「なんの指輪？」

「指輪ないの？」

「だからどの指輪？」

彼女はとぼけているわけではなく本当に心当たりがないようだった。きよとんとしている。もしくは、いくつか持っている宝物の中からどれを出してくればよいのか図りかねているといった表情。悪魔を使役するためのものから駄菓子のおまけまで、片っ端から出される前にナイチンゲールは補足した。

「愛情の証に、交換したり、肌身離さずつけたりするものよ。相手を裏切らないという契約のしるし。ないの？」

「ああ、それね。あるよ。これさ」

梟は得心行つた口ぶりでそう頷き、唯一身に着けているものを示した。真っ白な裸身に絡むのは自らの髪と、その銀色の鎖だけだ。首から下げた十字架を掬い上げるようにして梟は左手に載せ、こちらへと差し出す。

思い出すのはまた彼のことだった。名前のない男。いや、ある。それは梟が掴まんでいるこの鎖の先に記してあるのだが、ナイチンゲールは殊更にそれを注視することはなんとなく、避けていた。深い理由はない。ただそれが良識であり、暗黙の了解であり、礼儀のひとつではないかと思えたので。堂々と裸で歩く女をじろじろ見ないのと同じだ。だからナイチンゲールは彼の本名を知らない。他に誰もいないところで、梟がそつとそれを呼ぶことは、あるのだろうか。

ちよつと裏向けに見せられたそれからさりげなく視線を外し

つつ、ナイチンゲールはなんとなく呟いてみた。

「指輪もらえはいいのに」

「なんで指輪するの？」

「そういうものだからよ」

「そういうのって、すぐどっかにいつちやうんだよ。首にかけてくのが一番いいんだ。髪飾りも昔なくしちゃったしさ。悲しかった。それでこれをもらったんだけどね。ちようだいと言えば、くれる。握ったままにするのがコツ」

得意げに語るその必勝法でいつもイドのものもぶんど取る女を横目に睨んでナイチンゲールは呆れる。

「彼のはなんでもあなたのものなの？」

梶はこともなげに頷き、

「そうさ。で、私のものはチビのものってわけ。簡単な話だろう？」

「《森》の偉い人たちで集まることもあるんでしょう？そのときには彼は参加しないの？」

「人間だからね。しないね」

太平楽な顔であつさり言う。今一つ納得がいかずナイチンゲールは問い返した。

「でもあなたの夫なら参加すべきじゃない？」

梶は自分の薄紅色の唇に触れた。多少考え深げな面持ちになり、天井へと視線を向ける。彼女がなにか多少難しそうなことを考えている顔になるのは、こうした縄張り関係の話のときだけだ。「んー。そういうのあいつ嫌がるからなあ。《森》のことに口出し

はしないよホーホーに任せるよっていうつも言う」

「やっぱり内縁の夫というか……ヒモなのかしら。意外と真面目そうなんなの」

「紐がどうしたの？」

「どうもしない」

気楽な様子で聞き返す梶は無表情に応じているうちに、彼女はむくつと起き上がった。またこちらへと戻ってきて座りなおす。お茶を一口。わくわくした目をして問いかけてくる。

「ねえチビのこと好き？」

「それあなたにとってなんの得がある質問なの」

大人もどき。境界をふらつく男。現実主義者ばかりたがる夢想家についてこれ以上なにを語ればいいのか。

梶は嬉しそうに口元を綻はせ、目を大きくして言った。

「私は大好きさ。お前も好き？」

「……別に、取り立てて、嫌いじゃないわ」

結局のところ、好きか嫌いかと言われれば。そんな質問に答える義理などないので迷いなく質問者を殴って黙らせるだけだった。

ただあえてなにか答えるならば。

鋭い牙を持つからといって、無闇に犬を恐れるのは馬鹿のすることだ。それが賢い目をしているのならば、なおのこと。

そう結論付け、ナイチンゲールは素っ気なく回答したのだが、「それはつまり嫌いの反対で好きってことでもいい？」

梟はきらっと目を光らせて言った。はしゃぐ。

「わーい。いいことを聞いた。チビに教えてやるう。小夜啼鳥はチビのことが好きーチビ喜ぶー」

こちらをからかい囁し立てるといふよりは単に喜んでいろいろののだが、看過できる話ではなかった。

「ちよつとなんでそうなるのよつ！誤解を招く表現やめなさいよね！余計なこと言ったら殺して腑抜いて剥製にしてやるから！」

「うわあそうだったよ！こいつ剥製屋の娘だー!!」

梟が大袈裟に両手を振り回すのを不機嫌な視線だけで追いつながら、ナイチンゲールはその華奢な手首を彼が壊れものでも扱うようにそつと掴むところを思い出している。あの男は無造作なようにいつでもそんな仕草をする。

骨ばつた、体温の低そうな手を梟の指はいつも嬉しそうに握り返す。優美な白い指先は、見た目に反していつも子供っぽい動きばかりする。しかし取り澄ましてじつとしているよりも、その方が不思議と魅力的なのかもしれないなかつた。

むすつとしたまま、苺をつまむ。お代わり自由のお茶は不思議と冷めない。さらに漬物を齧つてみて、飲み込んでから、ナイチンゲールはなんとなく話しかけた。

「剥製つて退屈そうだと思わない？」

「動けないし中身はないしたまんないな。人間はひどい」

「中になが入ってるか知ってる？」

「知らない。おが肩か？」

「正解。あと綿ね」

「痒くなりそう」

居心地悪げに首を揺する梟。そんな仕草は鳥らしい。

「防腐剤は臭くないのを使うように言っておく。硝子の目も嵌めてくれるわよ。あの人は義眼を作るのが上手いから……張り切つていいのを拵えてくれるんじゃないかしら」

「いらないうつて言つていい」

嫌そうに言つて、しかし梟はなにか思いついた顔になりこちらへと身を乗り出した。

「でも、目玉だけなら欲しい。剥製は断るが、目玉だけちようだい」

「なんでそんなもの欲しがるの？」

呆れ返つてそう答えつつも、話題から自然と、ナイチンゲールは相手の眼球を意識する。

濁りのない澄んだ赤。鮮やかな血の色。どこかにあるという運命の鳩時計、その白黒二色の無数の鳩たちの死骸が積もる、鳩の墓場から採れる至高の紅玉を思わせる瞳で梟はこちらを見つめた。美しいその色彩だけでなく、活き活きとした表情をなみなみ湛えて片時もじつとしていない。

あの青い目の青年も、結局は、この双眸に焦がれているのかもしれないなかつた。彼の目は深い紺碧を湛える。空ではなく海に近い色。見通せない屈折を抱えた瑠璃色的一对。いや、そのくせ透明度は高いので青玉が近い。紅玉と青玉は、そもそもが同一の鉱物であり、姉弟のようなものだとふと連想する。梟はそれを

知っているだろうか。

「何色なにいろでもいいのか？何個までいい？」

「貰える前提で話を進めないで頂戴ちやうだい。やめなさいよ目玉なんて悪趣味よ」

「目玉いいじゃないか。お前目玉こわいの？」

「怖くない。雀すずめと一緒にしないで」

梟はがっつ口を開いて牙を見せ、顔の傍そばに鉤爪のふりをした両手を掲げた。こちらへと覆いかぶさってくる。

「私梟だぞー食べちゃうぞー」

「やれるもんならやってみなさいよ」

腕捲りしてナイチンゲールが受けて立つと、彼女は愉快そうに相好そうこうを崩す。そして優しげに微笑んで、興味深げな口ぶりで尋ねてきた。

「お前どこの森からきたの。ここでは小夜啼鳥みんなそんなに強いのか」

その質問は実際の外れだったが、はぐらかすことなくナイチンゲールは回答した。なぜそうしたのはかは、よくわからない。ただ言葉が自然に唇の間から滑り出した感覚。

「私は森を知らない……私は宮廷に居て、そして井戸の底から来たわ。森育ちの小夜啼鳥のことは知っているけど、地味でつまらないやつよ。取るに足らないわ」

「きゅうていつてなに？」

「お城。皇帝……王様がいるところ」

不思議そうに尋ねる梟に説明する。彼女にはよく、こういうところがある。

白く長い睫毛まつげ。素直なカーブを描いている。そこに光を弾くようにして、ぱちぱちと梟は瞬またきした。

「やっぱりお前、お姫様か」

ナイチンゲールはかぶりを振った。

「違ちがうわ。ただ皇帝一番のお気に入りで、国の宝だったのよ。世界で一番大きな国の、大切な特別な宝物たからもの」

声音に悲しい色が混ざらないよう努力が必要だった。すべては真実であり、約束された性能スぺツだ。恥はずべきことなどなかったはずだ……

「私は誰よりも綺麗で、そして誰よりも素晴らしい歌を歌えたから。誰よりも正確に忠実に」

「すごい」

梟は素直に感嘆の声を上げ、漬物を齧りながら敬意を込めた目つきでこちらを伺かった。ナイチンゲールは微かかに嘆息し、きっぱりと続ける。

「そんなのは当たり前のことよ。だってそうなるように私は作られたんだもの。なら、そうでなければ……意味がない。それでしょ？」

「そうだな」

なんの気負いもなく、梟が即答したことについて。ナイチンゲールは多少意外に思い、そして自分がそれよりも高い割合で傷

ついたことを自覚せざるを得なかった。

役目を果たせなくなった道具には意味がない。彼女が明るくそう言い切ったことが、胸のどこか奥深くやわらかいところに鋭い針のように突き立って痛かった。そんなことはないし笑い飛ばしてくれることを期待していたのだと気づかされればなお惨めだった。ナイチンゲールがひとり、唇を噛み締めて感情を殺そうと身震いしている間に、

「私は誰よりも強いよ。誰よりも速く、堅くて、鋭い。絶対に負けない。そう生まれたんだもの」

梟が喋り出していた。明るく自信に満ちた口調。はつきり前を向き、紅い目でナイチンゲールを見つめている。

「縄張りを護るのが私の役目。だから誰にも負けないよ。挑んで来たらみんな捻り潰してやる。みーんな殺す。だってそれが私にいる意味だからね、だから負けたらダメだろ？」

潰す、殺すというのは脅し文句ではない。彼女が百年に満たないというまだ短い生のなかでどれほどの強者を退けたかの逸話は、多少イドから聞いて知っている。彼女は他者からは畏敬を込めて『不落』とすら呼ばれている。防戦のみで侵攻の記録はないが、全戦全勝でこの梟領を守り続けてきた生え抜きの戦姫だ。

「……そうね」

そんなことを思い出し、彼女の輝かしき戦歴と自信とを思い出し。ナイチンゲールはふと尋ねてしまった。口にした瞬間、負け惜しみでしかない後悔した。

「あなたは、負けたことがないの？」

梟は朗らかに笑み、即答するだけだ。

「ないよ」

「そう……」

心中はひどく複雑だったが、つとめて外見には出さなかったはずだ。ナイチンゲールはそつとお茶を啜った。あたたかい甘いお茶は不思議な味で喉の緊張を緩めてくれる。劣等感と羨望、あるいは憎しみさえも湧いていたのかも知れない。だがこの奇妙なお茶を用意して、一番良いところに座れとばたばた敷物を整えてくれたこの気のいい梟のことを思えば、そんなことは愚かなだけだと理性が諫めてくれる。

嘆息をひとつだけ。湯呑みの中に隠すように、そつと。

「ならそのまま、永遠に負けないことを祈るわ。同じ鳥のよしみで」

「負けないよ！」

それは紛れもない本音だった。皮肉を追い払うことができても本当によかったとナイチンゲールは誰にもなく感謝した。彼女に嫉妬しながら生きていく道だつて、すぐそこに転がっているのだ。でもそれは決して選ばない。選んで、やるものか。

「お前だつて誰にも負けないだろっ？」

ふいに梟がこちらへ向き直り明るく訊いた。あまりにも当然の事を訊く調子だった。彼女はかつてナイチンゲールが壊れたことを知らないのだ。がらくたに成り下がりが長持ちの中に永遠に埋葬されたことも知らないのだ。本物の小鳥がやってきて、皇帝を救

い、あなたかいお前こそが真の友、さああの役立たずの偽物を壊してしまえと命じられたことなどなにも、なにも知らないのだ。

壁に背中を預け、そのごつごつとなめらかな凹凸を感じ取りながら、ナイチンゲールは静かに囁いた。

「もし私があなたの家の置物なら」

壊れた小鳥は長持ちの中に。不要物を入れる蔵。そこは霊廟。すべての扉は何重にも閉じ、生きたまま自分は閉じ込められた。役に立たないから。もういらぬから、ここで死んでいくといいよ。暗闇の中で誰かが常にそう囁いた。それは幻聴なのかもしれない。なかつたが、今でも夢に見る最悪の恐怖の記憶だった。

唇の震えを誤魔化して、梟へと話しかける。

「せめて毎日埃くらいは払ってくれるかしら。それとも捨てる？」

「うちに住むのか？」

梟は嬉しげな声をして顔を上げるが、ナイチンゲールはかぶり振った。

「ただの置物。動かないし喋らないし歌わない。ただじつとしてるだけ」

「それは死体じゃないのか？」

「起きてるわ」

「目は動くの？」

「動かない」

「やつぱり死んでる」

「起きてるわ」

「それはなぜぞぞ？」

「いいえ……」

不思議そうな梟に曖昧に答え、馬鹿な質問をしたとナイチンゲールは自己嫌悪に陥った。砂糖抜きのカフェのような色合い、苦味、気分はそんな雰囲気になる。自分で飲み干せもしないものを作り出してしまった。しかも他人も巻き込んで。

もういいわ、忘れて——

ナイチンゲールがそう声を掛ける直前に、いつしか真面目な顔をして考え込んでいた梟がゆつくりと口を開き始めていた。

「もしお前がそんなだとすると」

声音は困惑きみだが、敵かではあつた。洞窟の奥を指差す。

「とりあえず、そこあたりを片付けて……私の寝綿をわけてやるから、そこに寝かすよ。そこなら居心地がいいはず。私も大事にはするけど、毎日埃を払うならチビに頼んだ方が確実。あいつそういうの得意。服も着せてくれるし、髪の毛も編んだり、結んだりしてくれるんじゃないかな。うまいよ。だから心配いらぬ。ただ、時々躓いたらごめん」

こちらをまつすぐ見つめ、口元に微笑みを浮かべて。梟は動かなくなつたナイチンゲールを受け入れる意思がいつでもあると保証した。その場限りの思いつきや嘘を言っている目には、見えなかった。

「私は私で暮らすので……お前はまあ、好きなだけのんびりしていればいいよ。時は広い、遠慮はいらないさ。それで起きたら私

と遊んでくれればさ。それでいいんじゃない？」

「起きないのよ」

しかし咄嗟にナイチンゲールは反駁した。意固地な声が洞窟の壁に当たって弾みもせず潰れる。それを追うように一瞬瞳を動かして、梟は不思議そうな目の色をして、しかし確信を持って言った。「起きないの？でもずっと起きてるんでしょ。ならそのうち起きるだろうから待つてるよ」

彼女はいつも当たり前前のことを言っている顔で話す。あつげらかんと大切なことを言う。誰もが口に出すことに苦労したり、自分で認めるのに回り道をしたりするような色々なことを、勝手に飛び越えて遠慮なくそこらへんに放り出す。気遣いはとてつもななく下手だ。しかし根元が素直なら婉曲さなどただの修飾であり、あまり意味を持たないのかもしれないなかった。

優れた裸像を覆う不必要な衣服と同じ。そんなものは余計なお世話であって無料なだけだ。齒に衣着せぬ梟の言葉は快く、ずっと胸中に落ちてきた。我知らずナイチンゲールは強張った両肩から力を抜いていた。握りしめていた拳をゆるめる。

そんな束の間、梟は愉快そうに首を左右に傾けていた。置物のナイチンゲールとどう暮らすかについて、楽しい想像を巡らせているらしかった。

「私はお前を揺すぶったり、話しかけたり、くすぐったりするだろうね。それでもお前起きない？私はかなりくすぐるの強いよ？じっとしてはいられないんじゃないかな？だからきつと起きると

思う。まあ好きだけ、じっとしてればいいけどさ。よくくすぐりっこしよう私が必ず勝つー」

「やめてちよつとやめなさいよ冗談じゃないわよやめてったらー」脇の下をくすぐられて本気の悲鳴を上げてから、ナイチンゲールは慌てふためいてなんとか猛禽の魔手から逃れた。洞窟の中を裸足で走って距離を取る。壁には柵が設えてあり、干した草やら得体の知れない粉末やらがぎっしり並んでいる。

「こんどくすぐつたらぶつわよ！今のが警告よ！わかってるでしょうね——」

遠くから拳を振りかざして叫んでいるこちらにはまるで取り合わず、梟はただ明るい声で言った。

「でもそれより先に、井戸の底に帰った方がいいな。すぐに井戸のがよくしてくれるだろ。そしたら遊びにきてよ。その方が話が早いよね」

得意そうに指を立てる。はきはきと囁く。

「もしお前が置物になったら、すぐ井戸のを呼ぶ！そうすれば安心だ。そうだろう？」

にっこりと笑んで、彼女はこちらにそう同意を求めた。ナイチンゲールが頷かずじっとしているのを見つめ、また優しい声を出す。

「もちろんお前がしばらく私の癖にいたいって言うなら、話は別。好きなだけいてもいい。私だってチビの家にいたいもんな。でも、井戸のは心配するだろな」

「どうして？」

「ダメって言うかも。そうしたら、どうしようかな。お前がどうしたいかだよ。もし私のどこにどうしても泊まりたければそう言っといて。戦うから。井戸のを追っ払って、それで埃もちゃんと払ってやるから安心してよ。でもそのうちいつかは帰らなきゃダメだよ。井戸のも諦めないだろうしな。毎日戦争なんて、私やだ」

「どうして？」

ナイチンゲールが同じ音を二度繰り返すのを受け、梟はふと仄かな愛いを帯びて微笑んだ。一瞬、外見に見合った歳に見えた。

「決闘も戦争も好きじゃない」

「違う。御母様の話」

「井戸のがなに？」

「御母様が……心配したり、あなたと決闘したりすることについてよ。なぜそう思うの？」

ナイチンゲールは口ごもったが、梟はなにも気にしない。不思議そうに首を傾げるだけだ。先だつての珍しい表情はもう消えている。

「なぜって？」

「なぜはなぜよ」

ナイチンゲールがまた同じ音を繰り返すと、梟はなぜそんな当たり前のことを聞くのだろうという顔をした。

「だつてお前は井戸のの一番のお気に入り、一番大事な宝物だろ。どっかにいったら、躍起になって取り返すに決まってるじゃ

ないか」

自分が馬鹿げたオルゴールにでもなったような心境だったナイチンゲールは、ぼんと投げ渡されたその言葉を受け止め損ねて持て余した。しかし取り落として壊したくはなかった。気の利いたことは言えず、意地の悪い念押ししかできなかった。口にした瞬間後悔したが言葉は相手の元まで音速で飛んでゆく。

「……私が役立たずで場所塞ぎなただの置物でも？」

「井戸のは綺麗な置物ならたぶん好きだぞ。でもお前が置物になったら困るだろうから、すぐなんとかしてくれと思うぞ」

「どうかしら」

「あつたりまえだろ。なんでわかんないの？おかしな話」

秒速三四〇メートル。それならつまりは多少の距離など無意味だと思える。ナイチンゲールはそつと、また彼女の方へと歩み寄り始めた。

「見たらわかる。井戸のはお前が大好き。私はチビが大好き。ん、ひよつとするとあれは単に鳥が好きなのか？それはつまりやはり剥製屋か？」

「あの人は贗作屋」

「かなり剥製屋に近いってことでもいい？」

「まあ、間違つてない」

「関わりたくないかも」

嫌そうに言う梟を眺めながら、ナイチンゲールは己の記憶を呼び起こす。主に対してふと、鳥が好きなのかと聞いた時のこと。

イドはこともなげな顔をして即答した。

「嫌いではないけど別にこれと言つて思い入れもないよ。どちらかと言えば、としかけ 蜥蜴の方が好きだ。井戸と言えば、かえる 蛙だけどね。井守と守宮の違いわかる？」

その後「ごちゃごちゃ続いた話題は最終的に肺魚がどうのこうのと言う話になったが、鰓えらではなく肺を持つ魚などいるはずがなかった。なぜ彼女はすぐろくでもない法螺はらを吹くのだろうか。水中では息が続かなくなり、呼吸の為にいちいち水面に顔を出しては鳥に捕まる。そんな魚などいてたまるか、ナイチンゲールは子供騙しの出鱈目でたらめに憤いきどおつたので主の向こう脛すねを蹴飛ばして黙らせた。そんなとろくさい魚がいるわけがない。鳥から鳥が好きかと聞かれれば普通はもうすこし答え方があるのではないだろうか。なぜ水から上がらぬまゆを作り土の上で堂々と冬眠する魚の与太話など聞かされる羽目になるのだろうか。わけがわからない。

「虫も好きよ」

としかけ 蜥蜴と蛙かえると得体の知れない魚を纏まとめて強引なカテゴリーに押し込みナイチンゲールが慨然げぜんと言つと、

「やつぱり剥製屋だ」

「死んだ虫の形を整えて、ピンで留めるのが上手いわ」

「たままないなあやめてほしい」

自分だつて虫の翅はねを貯め込んでいるくせに、ぞつとしない顔で鼻は呻うないた。その表情がいかにも台詞通りだったので、多少可笑しくなりナイチンゲールは鼻から小さく息を漏らした。

鼻が顔つきを一転させ、無遠慮にこちらを指差す。

「あ、笑つた」

「笑つてない」

むすつとしてナイチンゲールは即答するが鼻は相変わらず取り合ひはしなかった。明るい顔で、言いたいことだけ勝手に言う。「うそだあー。たまに笑うよ。私知つてる。お前笑うとかわいいんだから、もつと笑えばいい。笑わなくても、かわいいけどな」

「そんなことを誰かに言つたら叩く」

「お前が私を叩くつて！小夜啼鳥が鼻を叩く！おつかしな話！」

きやつきやと鼻は笑い転げる。なにがツボに嵌はまるのかわからない。また吐息だけ漏らして、ナイチンゲールはほんのすこし唇の端を上げた。わざと意地悪そうな目つきを作つてみて、はしゃいでいる女を見やる。

「かなりひどく叩く。あんたはしばらくお粥かゆしか受け付けなくなるわよ」

鼻は気の利いた冗談に素直に受けたという反応を示してから、優しいな声を出した。

「そんなのつておかしな話！お前は麦のお粥好き？」

「オートミールは嫌い」

「でも甘くしたのは美味しいよ。母の干したのとか葡萄ぶどうの干したのとか入れてさ。スパイスも入れる。今度炊たいてやろうか」

「気が向いたら頂くわ」

鼻は喋りながら木苺を次々指ごと口に入れていく。黒と赤のラ

ズベリー。よく熟れており甘い。

「なあ、ここに泊まるって言ってみないか？井戸のがどんな顔するか見てやろうよ」

指を口の中から出した瞬間、突如素晴らしい閃きを得たという目つきをして彼女はそんなことを言い出した。ナイチンゲールがなにか返事をする前に、どんと裸の胸を叩く。

「まあ任せとけ！私が言ってるから。お前はむりやり巻き込まれたみたいな顔してくんだ。いつものつまらなそうな顔、あれ得意だろ。で、私は、お前が気に入ったからもう返さないよって言う。あ、うちの置物にするって言おうか？」

その傍にそっとしゃがみつつ、

「御母様はあなたの機嫌が取りたいのよ。これ幸いと私のことを置いていくかも」

ナイチンゲールが慎重に言葉を発してみると、相手はなんの躊躇いもなくそれを一蹴する。

「そうはならないってとこ見るんじゃないばっかだなあー。井戸のは絶対にお前を取り返すぞ。んー、でも、お前がつまらなそうな顔じゃなかったら別かもな。お前が、とても楽しそうにしてニコニコして、ここに泊まりたいって頼めば考えてくれるかも」

自分がとても楽しそうににこしている女は床に投げ出している長い脚を無意味にストレッツチ風に揺すった。

「でもきつと嫌がるぞー。私に迷惑とか言ってるなー。でもそうしたら私、迷惑じゃないよ！って言う。井戸の困る。さあどうなる」

得意満面の顔をされるが、用意した策がそれだけならば竿と棒と紐だけで雀を捕まえる試みより間が抜けているとしか思えなかった。

「そんな簡単な人じゃないと思うけど……屁理屈の権化よ。一手読んで潰しただけでは難しいんじゃない？」

「もうめんどくさくなったら全部潰しちゃえばいいよね」

「違う。物理的な話をしてない。手をにぎにぎしないで」

ナイチンゲールが諷めても梟は終始けるとした笑顔でけるとした声を出すだけだ。顔の横で鉤爪みたいにわきわきしていた両手はそのままに、

「私はチエスが強い。チビにも勝つ」

「それはとても強いわね」

当然のごとき顔で言うので、呆れも隠さずナイチンゲールは極めて白々しく同意したのだが相手にはいつも通りなんの皮肉も通じなかった。

「だろー？女王の駒は強い。四方八方へどこまでも動ける！私は十五個も持つてる！」

そんな斬新なルールは聞いたことがなかった。ナイチンゲールは思わず我が耳を疑う。

その奇つ怪な盤面を思い浮かべてみる。すべての歩兵がプロモーションしたとしても数が足りないし、要するに王以外すべて女王という意味だろうか。歩兵も皆番も騎士も僧正もみんな女。全部王様の妻。それでゲームが成立するのか考えるだけでも馬鹿

らしかった。想像力の限界を試され最終的には顰<sup>ひそ</sup>めた眉から声を  
出すような心地になる。

「それは後宮？」

「……きゅうつてなに？」

「皇帝の妻が何十人も暮らしてるところ。男は入っちゃ駄目。あ  
なたの王つてお妃様何人囲<sup>む</sup>つてるの」

「十五人。倒しても倒しても立ち上がる」

「頼もしい話ね」

梟は重要な秘密を打ち明けるような輝きを目の中に灯した。こ  
ちらを見たまま、床の上を適当に指差す。

「チビがな？私がおしここに指したとすると、俺は次ここに指す  
よつて時々うっかりと言うわけ。それをよく考えると、じゃあこ  
こに指さなかったら私負けないじゃんつて読める。だから、予想  
外のところに指す。すると勝つ。あいつは馬鹿だなあ、余計なこ  
とと言わなきゃいいのになあ」

「ええ、本当にそうね」

「手加減をすることだつてあるよ。いつも勝ちじゃつまらないか  
らね。女王を五人まで減らすことだつてあるさ。そんなときはい  
つもチビはうっかりするね。まったく駄目なやつさ。おかしな  
話！」

梟はいつも独特の喋り方をするが、これは汎用性の高い口癖の  
ひとつだ。気の利いた冗談で愉快だという意味から、理屈が通ら  
ずあまりにも非道いという意味まで幅広く用いられる。うっかり

するとふとした弾みにこちらも口走りそうになるので注意が必要  
だ。

今はへんてこで笑いが止まらないといった程度の意味合いで  
使われたらしく、梟はご機嫌<sup>かた</sup>の顔で無邪気な角度に首を傾けた。

「私はいつも白を選ぶ。お前白黒どっちが好き？」

「どっちでもいいわ。だからあなたとやるなら、黒でいいよ」

開始の号令とともに、い一番に女王から蹴散らかされる気の  
毒な歩兵について思いを巡らせナイチンゲールが答えていると、  
「井戸のは本当は青が好きなのか？」

唐突に問われるが心当たりはすぐに見つかった。

「ああ、あれ……なんだかよくわからない。別に、青が好きなの  
じゃないと思う」

イドは適当な名前を名乗ったり、相手に勝手にあだ名をつけた  
りするのが好きだが、トワイライトとチェスをやる時はなぜか、  
自分のことを決まってディープ・ブルーと名乗る。彼のことはカ  
スパロフと呼ぶ。棋譜<sup>きふ</sup>にもそう書かせるので、覚えてしまった。  
意味はまるでわからない。

「青い駒を作れば喜ぶかな」

梟が邪気のない態度でそんなことを言い出したのを受け、ナイ  
チンゲールは顔をしかめた。迷惑極まりない。

「彼の家駒を全部絵の具で塗るわけ？やめなさいよね」

梟は大体なにを言われても気にしない。にこにこして次々思  
いつくことを口に出すだけだ。

「チビはだいたい白を選ぶね。井戸のがいつも黒だ」

「そうね。私とやる時も、だいたい御母様は黒を選ぶかも。彼との話は、どちらが先なのかはよくわからないけど……」

錬金術における黒と白の意味を考える。彼ならば黒を欲しがりそうな気がするが、実際には白を選ぶ。それが偽らざる本心だということだろうか。理由など単に、イドの好みの逆を選びたいだけなのかもしれないが。もしくは戦略的に、先手と後手のどちらかを好むかというだけの話にすぎないのかもしれない。ただ有利な白を使いたいだけ。そしてもうすこし簡単で、意味のある理由も、どこかにあるような気がする……

「ひよつとすると……だけど。あなたが必ず白を使うから、自分も同じ色を使いたいんじゃないかしら。彼はあなたが大好きで、どんなときでも、あなたの味方だから」

現実主義者ぶりが夢想家についての、それはただの思いつきであり、深い考えなどではなかったのだ。

ナイチンゲールがそう呟くと、真つ白な鼻は、美しい顔の花開くように綻びせた。洞窟の中が明るくなったような錯覚。一呼吸置いてこの上ないほど幸福そうな声音で叫ぶ。

「ああ、そうだね！そうに違いないよ！お前は頭がいい！私は気がつかなかったよ！それは絶対、そうだよ！」

一瞬、その美しい表情に見惚れていた。その隙に相手は真正面からこちらに飛びついてくる。やわらかい寝綿の上に押し倒されて痛みはなかったが、全裸の美女に全身遠慮なく絡みつかれて転

がっているのは居心地の悪いものだ。

「重い！どいて！はなして」

じたばた暴れてみるが鼻はナイチンゲールを抱きしめて頬擦りしている。熊のぬいぐるみみたいに抱かれるのは不本意である。自分は手乗りの鳥の細工物だったはずだ。

相手はこちらの抵抗など一切意に介さず、子供のようにくつついたまま顔を寄せてきた。間近で覗く鼻の瞳には、星のような輝きが宿っていた。

「お前は賢い！きつとそうに違いないよ。私はどうして気づかなかったのかな！すごいすごい。すごい秘密を暴いたぞ」

白い頬が紅潮し、双眸は興奮に潤む。鼻息荒く鼻はそう息巻いた。嬉しくて嬉しくて爆発しそうだと言った。全身が語っていた。

服のボタンに鎖が絡まないよう注意しながら、ナイチンゲールはふと囁く。

「彼には……気づかないふりをしてあげましょ」

「どうして!？」

鼻は素つ頓狂な声を上げる。見るからに言いたくて言いたくて堪らない顔をしている。今すぐ彼の元に、驚掴みにした有力な証拠を突きつけに行きたいという様子だったが、ナイチンゲールは目顔でそれを押しとどめた。

怪物殺しの寸鉄を身に帯びる男。弱さと強さの境界で、そのふたつの間で生じる反発力から彼は誰かを傷付け得るのではないだろうか。それは確かに才能であり、半ば呪いのようなものであり、

おそらくは自分で制御できるものではないのだ。だが律したいと考えているはずの男。小心だが己の役割を果たしたいと望み続ける刃。彼はそんな人物に思えた。

そして魔物を殺すならば銃がもしれない。彼の持ついくつかの性質の中にはそれも含まれるのかももしれない。人間の力の象徴。引き鉄は軽く、だが暴発ではなく彼の中の冷静な部分は常に自分の意思で狙いをつける。そのことにいつも後悔している。他意なく認めてしまえば、善良で優しい男なのだろう。人の輪からははみ出して、ちょっと背中を向けて立っている。どこか悲しげな、羨ましそうな顔で。梟はきつと、彼のそうしたところをすべて引つくるめて、愛しているのではないかと想像した。

そんなことを考えて、彼の気弱にはにかんだような仕草を思い出し、ナイチンゲールは語った。梟をそつと押しつけながら。

「恥ずかしがりだから。きつとその勝負は負けるわよ。動揺してね」  
荒っぽい抱擁からなんとか抜け出し、こちらが身体を起こすと、梟はまだうつ伏せに寝そべったまま両脚を交互にばたばたさせた。不思議そうな顔をしている。

「そう？でもさ、お前は井戸のの味方じゃないの。そういうのは……砂糖をどうのこのうの。いや、胡椒かな？」

「なんの話？」

「塩かも」

「敵に塩を送る？」

「それかな？」

「なにもかも確信持てないのに無理はしない方がいいわよ」

乱れた髪を一旦ほどいて結び直しつつ、ナイチンゲールは呆れて言う。彼女と話していると呆れのストックが尽きるのではないかと思う。もしも貯蔵が尽き果てたなら、自分も素直な顔で話せるようになるのだろうか。

「なんで塩なのかな？芥子じゃだめ？」

「さあ……でも、芥子を送るのは、嫌がらせじゃないかしらね。かなりの確率で」

そんなくだらない話をしているうちに、梟がまたなにかいことを思いついた顔をした。彼女はすぐそんな顔をする。陰気にしているところは想像できない。

ごろんと仰向けに転がり、彼女は手を伸ばして指先で丸を作った。楽しげに語り出す。

「卵の殻に穴を開けてさ。中身は飲んじゃつてから乾かす。そして芥子と胡椒を磨り潰して目一杯入れるわけ。芥子は赤いやつを使う。それを窓からチビの顔に投げる！もちろん命中！爆発！あれは傑作だよまったくおかしな話でさ！もう泣いた泣いた。痛いよー死ぬよー俺は死ぬーつてもうこの世の終わりみたいな泣き声出しちゃつておつかしな話で私笑つて笑つて息できなくてこっちが先に死にそうでさ」

ナイチンゲールはその細く繊細そうな指先を見つめる。躊躇なく泥の中に手をつまみ、わざわざ磨いているとも思えないのに、常に艶々光っている桜貝のような爪にどこか不公平を感じな

がら。呆れて呷く。

「それは本当に死ぬわよ下手をすると」

「食べ物顔に当たつても死なないさ」

梟は冗談だと思つたらしく明るく笑い飛ばしたが、すこしでも想像力を持ち合わせる存在ならば製作の段階でそんなものは人に投げてはいけなさと自重するのではないかとナイチンゲールは目の前の女の感性を疑う。

「それは対生物には爆弾だから。しかも不意打ちの顔面でしょ。致死性あるわよ」

「ち・せ・い・つてなに？」

「あの人がよく死なないわねつて話。昔からそんなことばかりやってたの？」

「ついこないだもやったよ。寝てたところに投げたのさ。泣いて謝るから愉快だよ！それはもう。なんでもしますからもう勘弁してくださいだつて！情けないやつ！水持つてきて水つて言うけど、泣いてるの面白かったからもう一個投げたつてわけ。爆発！階段落つこちてしばらく井戸から帰つてこなかった。桶の水に顔突つ込んで動かなくなつてた。おかしな話さ！」

幼児の残酷性というものは常識では計り知れない。あつけらかんと口を開けたその闇は深い。もはや垂直落下の陥穽である。自重しない女の大爆笑を聞きながら、ナイチンゲールはこめかみを揉んで唸り声を上げ、言い渡した。

「それを私に投げたら殺すわよ。あなたの子分だけにして。いい

わね」

「井戸のには？」

「やめてあげて」

「辛いのがなくて墨を入れても、面白いよ。臭い実の汁とかもね」

「その非人道的秘密兵器は封印しなさい。悪いこと言わないから」

「なんでー？」

しかめっ面で説得するも相手はまったく理解できないという顔でぼかんとしている。邪気だけは欠片もなく、こちらとしては溜息しか出てこない。これは未必の故意にあたらないうか。悪気はあるが殺意はないでも死にましたでは始末に悪い。

「ろくなことしてないわね。本当に、こちらにまで類が及ぶようなことは絶対にやめて。あと、バスタブにトースターを放り込むような類も禁止するわ。あなた自身が後悔することになるのよ」

「ホースターは知らないけど、風呂に薄荷油を山ほど入れたことならあるさ。飛び上がる！夏でも寒い寒い身体中痛いもう死ぬつて泣くよ。あいつ寒がり。匂いは私が誤魔化しておいたつてわけ！あいつは勘がいいからね。薄荷臭かつたらすぐ、ぴんとくるだろう？でも匂いのしない薄荷油つてものも、世の中にはあるつてわけ！なんでこんなことするの！凍えて死ぬもう駄目だ！だつてさ。ばつかなチビのやつ！まんまと引つかかった！他にも色々入れたことがあるさ！あいつは昔から泣き虫の弱虫！」

それはたぶん演技ではなく本気で泣いていたのだらうなあと思つてナイチンゲールは内心で彼に同情した。

梟はご機嫌で喋り続けている。彼女は常に絶好調である。相槌の代わりに溜息ばかりつかれても全然、臍を曲げたりしない。字が読めないから空気も読めないのだろうか。気が大きいのも考え物である。

「それに服の中に毛虫や蛇を入れたりもね。部屋の中に蜂の巣を放り込むともう、傑作！あいつ蜂が怖いのだ。昔散々刺されたからね。まあ私が無理矢理けしかけたんだけどさ。蜂蜜採りね。家に隠れるなら窓から投げ込むってわけ。それで、外から入り口を押さえる。傑作！」

「彼はそのうちあらゆる窓に板を打ち付けるんじゃないかしら」「なんでそんなことするの？おかしな話。家の中が真つ暗になる！」

想像したのか、梟は吹き出した。

片手だけで器用にマッチを擦って、達観した顔で燭台に火を灯しそれでも本を読もうと試みている彼の姿を思い描きつつ、ナイチンゲールは真顔で続ける。

「暗闇の中で静寂とともに生きることを選びたいとふと思う日が来るかもしれない。それが平穏と人生について考えた末に行き着く先かも」

「おかしな話！」

梟は底抜けに明るい笑い声を上げる。聞いているこちらもつられて楽しくなるような心地よい朗らかさ。洞窟の中をどこまでも転がるように響いていく。

「彼が蝋燭を買い込んだら注意した方がいいわよ。あと釘」

「真つ暗こつこつってわけ？それはなんでしょう？私はだあれ？ゲス・ワト・アイ・ヤム。私は得意さ。なぜぞぞ！」

「あなたも一緒に閉じ籠ったらあまり意味がないわね」

もはや引つ繰り返り、笑いすぎて咳き込んでから、ひよこつと起き上がった梟はまた改めて楽しそうな身振りをした。呆れて応じてから、ふとナイチンゲールは気付くものがあり問い返す。

「ある程度言葉がわかるの？人間の」

梟は人語を話していない。彼とは明らかに別の言語を使っているが、夫婦間での意思の疎通に問題はないようだ。だが今は部分的に片言の人語を発した。

白い髪の娘は得意げに目を光らせると、ずいど身を乗り出して喋り始めた。

「チヨコリト。カラメル。ウォーイポップ。エプウ。ウビー。ポニ……ポニグライット？ギグドウッドウー。ワト・アイン・グマイン・アン・ヤト・ウアーズ・ヒズ・アイン！」

わかったのは最初のふたつだけで、あとは呪文の類にしか聞こえなかった。

明らかに絶賛の類の感想を期待してめちゃくちゃ得意そうな顔をしている梟を見つめ、

「そう」

「まだ知ってるよ」

「ええ、もう十分よ。ありがとう」

深く頷いてナイチンゲールが申し出を辞しても彼女はまったく気を悪くはしない。鼻高々で足の指をわきわき動かすだけだ。

「どう、賢いだらう！びつくりしたんじゃない？」

「そうね」

「字も書けるよ」

「見え透いた嘘はやめて」

捨て身の見栄だか本気でそう信じているのだから、とにかく底の浅い嘘をつく鼻を冷たくあしらひながらナイチンゲールはにきよきよに動き動く白い爪先を見ていた。手のように各指が独立して動かせるらしく、器用に開いたり閉じたりする。動きを追うように行きつ戻りつ、その足の形を視線で辿ってみる。どんな靴も似合うように似合うように似合わない。

裸の描くやわらかなカーブはいかにも無邪気で、なめらかにやがて裸足の足先へと辿り着く。どれだけ森の中を駆け回ってもその皮膚に傷ひとつないということは理不尽なようであり、彼女がこの森の王だと示す明確な証のようににも思える。草むらを踏むとき、未舗装の砂利道を歩くとき、いずれも靴とは違う足音がするのだとナイチンゲールは学んでいた。川があれば気軽に入ることとできる。ただし足のつく浅瀬まで。

鼻は水が好きだが、その実、大量の水に全身を覆われることは苦手であるらしいとわかっていた。実際恐怖を感じたり、泳げないのかまではわからない。ただ、湯を張った風呂桶の中に座って肩まで浸かることさえ嫌がるらしいので意外な弱点ではある。な

お潜るのは絶対無理らしい。改善しなければ洗面器に水を張って顔をつけるところから始めるべきだとナイチンゲールは考えている。彼が手を引いてバタ足を教えようと試みているところを空想し、それは高望みだと指摘してやりたくなる。

やがて、ひょいとその足が視界から消えた。髪だけが翻る。

鼻が優雅に立ち上がったのだった。白い娘はとことこ歩いている、すぐなにか抱えて持ってくる。

甘酢漬の胡瓜や人参を齧ってお茶を啜りつつ、ナイチンゲールはそれを見ていた。鼻は威張りくさった顔でこちらの前にやってきて、勿体ぶって荷物を置いた。

それは元は贈答用のクッキーでも入っていたのではないかと思われる、錆びた缶だった。でこぼこしており塗装も剥けている。しかしどこか秘密めかして貫禄があるようにも見えた。鼻の子供っぽい自慢顔がそう思わせるのかもしれない。

「開けてみたいんじゃない？」

「あなたにしては、遠回しね」

期待でむずむずしているのを隠しめせずに鼻が鼻息を吹くのを見やり、ナイチンゲールはわざと白々しい声を出した。鼻は嬉しそうに破顔した。

「そんなに言うんなら開けてもいいよ！仕方ないね！こんなことは滅多にない。とても珍しい……そう……ええと、機会。これは特別さ！」

「だからなにも言っていないんだけど」

相手がなにを言おうが気にしていない。言葉が通じていてもこんなものである。相変わらず、片言めいてつつかえつつ喋る彼女は得意げに小鼻を膨らませている。みつともないからそんな顔やめなさいと言う必要がないのは理不尽ですらある。完成した美人は変な顔でも美人なのである。

我慢のきかない幼児並みに呆気なく陥落する梟へと大人らしく嘆息してみせて、ナイチンゲールは改めて目の前の缶を眺める。「これはね。舶来品。むかーしむかし、外から来たつてわけ。とても重宝でいい箱なんだよ。中に入ってるものも、もちろんいいものさ」

梟が受け売り満載の口調で講釈を垂れるのを耳に入れつつ、一抱えほどのその青色の缶を視線で撫でてみる。

この缶は鎖されている。隔絶の内にあり、だがそれなりの広さもあり、色々な人種がごちゃごちゃに暮らしている。つまり容姿は様々なわけだが、例えば誰に出会ったとしても、イドは外国人だと認識されるだろう。外見上の具体的な特徴がそう思わせるわけではないらしい。ただ疑いなくそう判断される。それは別な場所でも同様で、彼女の持つ様々な特性のうち、教えられなければ目立ちにくいもののひとつだった。

彼女は筋金入りの異分子だ。イドを同胞だと認識する存在は、いない。常に招かれざる客であり、座る席を持たない女。

そんな彼女は劇場やサーカスといったものに一定の興味を示す。秘密を隠すように重く垂れ込める網帳や、踊り子たちの色と

りどりの派手な装飾を見て一瞬なにかの感慨に耽るような目の色をすることも、ある。彼に構うのもその延長なのかもしれないが、それ以外にも理由はあるのかもしれない。いや、ないのかもしれない。白黒の意味より些細なことだ。だが座り心地の良い場所と、温かいお茶を勧められた自分の気持ち振り返れば、ぶつくさ言いながらごく自然に古い椅子に座る生意気な若者に多少の親しみを抱いていたとしてもなら、不可解ではなかった。

「……おたじゃうひ、たじゅやひ、おやわい、おゆわい」  
「ん？もう一回」

ナイチンゲールが突如そんなことを呟いたとき、梟は普段通りのただ不思議そうな顔をして首を傾げた。こちらの気が狂ったとは思わなかった。

「重宝な入れ物には梟がそんなことを書くこともあるの。賢いから代筆を頼まれるのよ。おたんうよひ、だったかも」  
「それはどういう意味？」

「親愛なる友人へ心を込めて。あなたは孤独ではないし惨めではないとか、そんなような意味かしら」

缶を見つめたままのナイチンゲールがそう言うなり、梟はしたり顔でひよいひよい首を振る。

「ああ、そういうことね。知ってた知ってた」

顔を上げ、ナイチンゲールは呆れ顔を作った。底をつくかと危惧される呆れだが、まだ在庫はある。嘆息する。

「適当な嘘をつくのはやめたほうがいいわよ、ほんと。あなたに

はその方面の才能がないから」

胡座をかいて両膝を揺すり、梟は笑った。愉快そうだった。

勧めに従い、缶の蓋を開ければ、ふっと不思議な匂いが鼻先を掠める。貴重な宝物の放つ神秘の気配と、遠い昔の舶来ものの菓子がの残り香と、金属光沢の甲虫の翅が醸す乾いた渋味。そんなものがごちゃまぜになつて、一瞬だけ色づくように浮かんて、すぐに崩れて空気に混じつた。もう一度嗅いでみたいと思つてナイチンゲールは名残惜しく鼻を鳴らしてみたが、もうどこにも見つけられなかった。楽しく無稽で絢爛な、夜の夢のような匂いだった。霊廟に潜む呪いの気配はそこにはなかった。この箱に収められたものたちは幸せなのだと思直に思えた。

「どうーすごいだろー！」

期待満面の梟。ナイチンゲールは缶の蓋を丁寧に脇に置く。

「ええ。これはなんの鍵？」

適当に指差して尋ねてみたのは、金無垢に見える大きな鍵。

十五センチほどもあり、頭の部分に薔薇窓に似た複雑な彫金が施され翠玉が鑲められている。錠前は見当たらない。扉に直接差し込むかもしれない。それは時の狭間に封じられた花園への入り口か、未知と財宝の眠る迷宮へ挑むための門なのか。あるいは……

「その鍵はどここの鍵なんだろうなあー。世界のどこかにぴったり嵌まる穴があるはずだよ。こんなに立派な鍵なんでも立派な扉や門があるはずさ。誰に聞いても知らないって言う。先代が持つ

てたやつだよ。旅人からあずかったのさ。むかーしむかしね。私も生まれるずっと前さ、たぶんね」

横から肩を寄せ、覗き込んで、梟は鍵を掴んで顔の前にかざす。

「どこの鍵かな？ 想像するのは、好き。きつとそうに決めつけて、頭の中にお城や迷路やお化け屋敷やいろんなものをどンドン作る！ そして探検！ 楽しい！」

ごっこ遊びに興じるには確かに雰囲気満点のアイテムだが大事にしなければいくらでも傷つきそうである。ナイフに見たてて振り回している梟からさりげなく取り上げて、手の中で眺めながら当て所なく想像を続けてみた。

「宗教的な建物……大聖堂とか。豪華絢爛で、壁画や天井画がすごくて。そんなところの鍵だとしたら、派手すぎるのかしら」

「滅びの砂漠！ 思い出した。あの硝子の砂の下に棺が眠ってるんだ！ それは本当のこと。あれは巨人一族の死んだ跡。これはその霊廟を開けるための鍵かも」

「人殺しの部屋かも。そこには血がいっぱい。大事な卵を持つて入っちゃいけないのよ。二度と取れないシミがついちゃって、入ったことがばれて、殺されてしまう。ぶつ切りにされて、部屋の中の血がまた増える。そしてまた騙された娘が興入る。繰り返すの」

次々思いつきを話しているうちに、ナイチンゲールが物騒な例を挙げ梟が即座に食いついた。

「なんだとー！よし、卵爆弾だ！お前にやる！敵を欺け！そんなときは顔に向かって、パンだ！」

力強く言い切ったが早いか奥へと走り、また箱を抱えて戻ってくる。紙箱の中に無邪気に並んだ卵たち。

「……これすべて爆弾？」

「白いの辛い弾、赤いのが墨の弾、ちいさくて斑点あるやつが臭い弾さ。勢い良く投げるのがコツ！持って帰れ持つて帰れ」

「ええと……まずは宝物を見てから考えるわ。それちよつと遠くにおいといて頂戴」

梟は自信満々の顔で、お手製の卵爆弾の威力についてまた語り始めたが、どうにもそれらは瘴気というか、辛味の気配をじわりじわりと発散しているように感じられて不安だったので、すこし遠慮してもらった。

近づくだけでこのプレッシャーである。被弾した人間は一体、どうなってしまうのか。これはなんらかの戦争条約で禁止されるに値すべき、威力の高すぎる武器には当たるまいか。卵と胡椒と唐辛子だけで残虐極まりない飛び道具が作れることを知りナイチンゲールは戦慄する。

「卵爆弾こわいの？おつかしな話」

「怖くない。ただ、戦争のルールについて考えていた」

その言葉を聞いて、梟はふいに沈痛な表情になり、眉を顰めた。「戦争のルール。面倒臭いね。ああ、ほんとにいやな話さ。ずつと戦争なければいいのに」

沈んだ声で呟き、鍵をそつとナイチンゲールへと手渡ししてくれる彼女。目が合えば、悲しげに微笑んでいる。また年相応の顔を一瞬だけ垣間見せ、次の瞬間には水から上がった犬のようにぶるぶると身体を震わせる。表情を隠すように長い髪が宙に舞う。視界が一時、ほぼ白だけに満たされる。

「それね、なんでも、好きに見ていいからね。欲しいのあったら、あげるかも。うーん、どうしよつかなく考えるから、そつちも友達になるかどうかちゃんと考えててね」

宝箱を指差して、そう言い残すとひょいっと立ち上がり梟は洞窟の奥へと進む。べちべち裸足の足音が遠ざかつて行く。真つ暗だった部分にも、ぼうつとした灯りがやはり灯る。

気のいい梟。自分の存在理由に疑問を持たない梟。明け透けで偏見を抱かない梟。あれほどボジティブで裏表のない彼女だつて、どこかに悲しみを抱えている。

先ほど見た儂い微笑は美しかったが、そんな顔をしなくても彼女は美しいのだから、好きだけザリガニを釣つたり寝転がつてお菓子を食べたり彼の背中に予告なしの飛び蹴りをかまして吹き飛ばしたりしているべきだと思つた。特権は活かすべきなのだ。

そんなことを強く念じている間、梟の表情は見えなかつたが背中越しに色々声をかけられ、こちらも返答した。他愛もない内容ばかり。特権についての話は、できなかつた。ほとんど怒りにも似た感情が胸を焦がしたが、どうしようもなかつた。こんなとき自分の不器用さを疎ましく思う。陳腐な励ましなど、上手くでき

るはずがなかった。

でも、下手でも、やってみることが。大切なかもしれない。踏み切る力さえあるのならば。それは勇氣と呼ばれる類のものかもしれない。そこまで大袈裟なものでもないのかもしれない。断言できることなどなにひとつない。狭間で誰もが睨んでいる。

溺れるものが手を伸ばし合うようにして、世界は繋がっているのか。どこまでも。沈みゆく身体を思索の暗闇に委ねた。波間の白い手を握る力は、なかった。

気の利いたことも気の利かぬことも、言いたいことは結局はなにも言えぬまま、ナイチンゲールはただ漬物を噛み砕き、お茶で流し込む。

得るものも与えるものも、なにもない。指先の汚れを押し付けられたハンカチがどんだん甘酸っぱい匂いになり、不明瞭な染みを浮かべるだけ。そのうちにマスタードの粒でも噛み潰したのか、ふと舌の上に苦味が生じ、それを機としてナイチンゲールは漬物を口の中に押し込むのをやめた。そんな切っ掛けでもなければ、この家にあるものすべてを自棄糞に胃袋に詰め込みたいような気分だった。

睨みつけていた漬物の皿から、視線を転じる。封を解かれた缶の中へと。

玩具の缶詰といった風情。それを眺めれば不思議と気持ちは安らいだ。彼らは幸福そうだった。妬む気持ちも湧かないほどに無邪気に詰め込まれている。誰かの大切なものたち。色とりどりの、

世界の一寸片。

そんなふうにして、宝箱の中にはまさに玉石混淆、いろいろなものが入っていた。好きに見ていいと勧められたものの、明らかに値打ちものと思われる類に触れるのは躊躇われたため(だつて漬物の手だ)、たまたま目についた変哲のないすべすべした黒い石を手にとり取ってみる。丸く磨かれ、掌に収まる大きさだが、持ち上げれば意外なほど軽かった。中は、空洞なのかもしれない。ナイチンゲールは両手の中でその宝物を転がした。親しげな感触だった。

汚す可能性と、熱心な好意を無下にすること。どちらが鼻をがっかりさせるのかと言えば、疑う余地もない。懐の広い陽気な王様も、そんな持ち主を戴く宝物も、今更多少甘酸っぱい香草の匂いが箱の中にくっついたところで、気にしないのではないかと思えた。こうして不思議な薫りはまた複雑さを増していくのだと気づく。醸されていく生きた秘密。自分は今歴史の一端を担っているのかもしれない。

「ねえー。小夜啼鳥、やっぱり友達になろうよ。友達になつてくれたら、これあげるよ」

螺鈿の櫛を触ってみようかどうしようかと迷っているうちに。洞窟の奥から戻ってきた鼻がそう呑気に声をかけてくる。宝箱はいくつもあるらしく、まずはナイチンゲールが低ランクのものをしている間に良いものを出してくるといったことを告げて彼女はどこかでがさがさやっていたのだが。

また別の箱を抱え、梟はナイチンゲールの傍へと座った。自分で蓋を取り中身を改めている。その際はわざとらしく傾けてまたこちらには見せないふりをしたりする。底の割れた行動である。やがて、彼女は顔を上げ、選り出したものを見せてくれた。厳かな手つきで。

「これにしよう。どうかかな？」

差し出されたのは透き通った結晶がひとつ。これも掌に収まる程度だが、色合いも形も、高密度の氷に似ている。《森》の終端、永久凍土と氷河の果てに立つ氷壁から削り出したような純粋な欠片の中には一輪の花が浮かんでいた。淡い淡い桜色の花卉と、瑞々しい緑の枝葉が一切の変色もなく封じ込められている。それは見知らぬ誰かの魂の存在を思わせた。気付かぬままに世界ごと凍りつき、そこにすべてが眠っているかのように。

「ねっ。きれいだろ。これはかなり特別だと思うよ。他にないもの」

「うん……綺麗ね」

手渡された石の澄んだ冷たさを感じながら、ナイチンゲールが素直に呟きをこぼすと、相手は屈託無く微笑んだ。

「お前のほうがきれいだけだね。世界一大きな国の王様の宝物。そして今は不思議な井戸の底の、一番の宝物」

目を糸のように細め、やわらかい声で梟は言った。楽しみに。優しくナイチンゲールの頭を撫でる。それはなんの疑いもなく、大切な宝物を愛で、慈しむ手つきだった。

しばらく、耳の中でその言葉を転がしていた。そして洞窟の中

へどこまでもそれが響き続けたところを想像する。遠く近く。石が囁く木霊。聞きたくなかったらいつでもここに来ればいいさ。梟ならば平然として、そんなことを言うのかもしれない。

不器用で陳腐な言葉は、発する者が心からそれと信じているのなら、なんら恥じるものでもないのだった。ただ温かかった。ナイチンゲールは一番の宝物だと認められ、疑いはない。そんな眼差しで梟はそれを告げた。なにもかもが、ありのまま。飾りのない事実。剥き出しの熱は胸の中に宿ってほんの少しだけ体温を上げる。冷たい匂いに抗する力。

「それは受け取れない……うまく持って帰れないかもしれないから。壊れてしまつたら、いやよ。綺麗なものだから勿体無い。ずっとそこで預かっておいて頂戴」

やがて、ナイチンゲールが小声でそう言い出したとき、梟はなんの揺らぎもなく当たり前前の顔で頷いた。

「うん。じゃあ好きな時に見にくればいいよ。チビに頼んでお前の名前を書いておいてやろうか。井戸のが欲しいと言つても、これは先約があるからだめつて言う。それは誰のもの？私は答える。それは私の友達、井戸の娘、小夜啼鳥！」

変な節回しで語る梟。言葉に合わせて陽気に踊つてみせている。案外様になる動きで、ひよつとすると、彼と踊つたりするのだろうか？ナイチンゲールは未知の領域についての想像をまた膨らませる。

しかし問題は今日の前にあるのだった。慌てて軽快なステップ

から視線をもぎ離し、

「名前は書きちゃだめ。台無しになるでしょ。絶対駄目よわかってるっ」

「それとも私が書いてやろうか？賢いからね。なんだっけ、おたんやうひ？およわい？」

「やめてやめて」

張り切ってやる気を見せている梟に取り纏すがって宝石を守ろうと奮闘する。髭ひげだらけにされたらおしまいだ。おたじゃうひ、から始まるあの呪文の意味を彼女が覚えているのかは、定かさだではな

い。「もし御母様ママにそんなことを聞かれても黙ちやうだいってて頂戴。私の名前は出さないで。約束しなさい」

「どおしてえー」

梟は当然ながら不服ぞうだ。一旦取り上げた結晶を取り落とさぬよう注意しながら、ナイチンゲールはすこしだけ考えた。正確には、考えるふりをした。心はどうに決まっていた。

そつと、告げてみる。

「約束できるなら歌ってあげる」

「ほんとー！」

梟は文字通り飛び上がって目を輝かせる。

話すことが不器用にしかできないのなら、得意なことをするべきだと思った。『親愛なる小夜啼鳥へ、お誕生日おめでとう』と書けもしない字で書こうとする、この気のいい梟になにか報いる

としたらそれが一番適切だと思える。

「約束できるの？」

ナイチンゲールが念を押すと、梟は梟らしい例の仕草で、ひよいひよい首を揺すった。

「するする。約束するする」

「するが多い」

「歌ってよー」

「話聞きなさいよ」

苦笑してナイチンゲールはそんな遣り取りを行った。呆れのスツクは大盤振る舞いに敗れついに品切れとなったらしかった。補給があるまでは、開店休業。こんなことだつて、たまにはあるのだ。

梟の真似をして、大きな声で笑ってみようかな、と、ふとそんな思いが頭を掠かすめた。それはまったくおかしな話で、愉快な冒険に思えたからだ。実践するかどうかはゆっくり考えよう。

洞窟の中はやわらかな光で満ちている。ハンカチからは酔に漬けたまれた様々なものたちの匂いがする。混ざり合う不思議な薫かおり。香草デグは腹の中に溜め込んだ悪い空気を吹き飛ばし、痛みを和らげる薬草である。



トワイライトは窓を開けた。爽やかな寂しさを含んだ初秋の風

が吹き込んで、室内のぎすぎすした空気を多少薄めた気がしないでもない。しかし希釈を試みたところで、容器の中に発生源が残っているのなら元の木阿弥ではある。

苛々した顔で席についているイドの方は見ず、トワイライトはうんざりした視線を窓の外に投げた。自分もまた発生源だった。刺々しい気配を発散しつつ、窓枠の棧に付着した土埃を払う。

紅茶にプランデーを入れるか否か、またその際砂糖を使うべきか否かという点について口論になりお互い死ぬほどこき下ろした挙句お茶が冷め切ってしまった結果についてどちらが悪かったのかと言うことで最終的にほぼ殺意を募らせるレベルまで彼女と罵り合ったが決着が付く前に梟が小夜啼鳥を伴い戻ってきたので勝負はお預けとなった。こちらには断固まだまだ言いたいことはあつたので千日手ではなかった。おそらくは相手も似たようなことを考えている顔をしていた。

なお、紅茶に蜂蜜漬の生姜を入れることをよしとするか否か、またその際生姜ごと使うか蜂蜜のみを用いるべきかについても過去両者の間に泥沼の議論を齎したことについてトワイライトは苦く思い出した。相手もたぶん同じことを思い出していた。それらは基本的にはきつかけにすぎず、結局のところ自分とこの女はなにかあるとういがみ合う宿命にあるのは疑いない。そして負ける気はないとトワイライトは考え、相手も同じ思考の筋道を辿っている気がして非常に不愉快になった。要するにイドもそんな目つきをしていた。俺の道標を使つて進むな逆に行けそして崖

から落ちて死ぬと言いかけた時、小夜啼鳥がふと口を開いた。「イモリとヤモリの違いってわかる？」

話題は唐突だったが、こちらへ向けて話しかけてきていたので、トワイライトは首肯し応じる。梟は勝手に階段を上つていったきり、戻つてこない。がたがた変な音だけ聞こえてくる。

「見た目っからして全然違うよ。イモリは両生類でヤモリは爬虫類、だろ？イモリには鱗があつて吸盤と爪と鱗がない。ヤモリは逆。指の数も違つて……えーと。たぶん、イモリの方が前から後ろか、どつちか少ないんじゃないかな。あと爬虫類ならつまり肺があるつてことでさ、イモリの肺は不完全だから、皮膚呼吸もしなきゃ賄えない。だから水の中にいる方がイモリな。色々言つたけどとにかく見た目で一発でわかるよ。赤と黒でヌメツてるのかイモリで、灰色のサラサラしたやつがヤモリさ」

なにをどの程度求められているのがよくわからず、とりあえず思いついた範囲で説明してみたが、必要以上に喋つてしまった気がするのは先程までイドと延々言い合つていた弊害だと思われる。朱に交われば赤くなるという諺を思い出しトワイライトはうんざりした。やめてほしい。

小夜啼鳥は頭の中で正答と突き合わせ合格したというような目つきで少し黙つていた。意外だというよりは案の定だとか、やはりこいつもかという目の色に見えた。そのまま質問を重ねてくる。

「肺を持ち水上で呼吸し土中で繭を作る魚が存在すると思う？」

それは別に冗談として発せられたわけでもなさそうだったの  
で、気軽にトワイライトも応じる。彼はにこっとして肩をすくめ  
た。

「いるんじゃない？だつて卵から生まれて、乳を飲んで育つて、  
鳥のくちばしと四本の足と水かきと海狸の尻尾がついた動物だつ  
ているんだぜ。おまけに毛むくじやら。水陸両用で、さすがに空  
までは飛べねえけどき、鋭い爪と毒針だつて持つてるんだ」

「いるわけじゃないそんなの」  
「それは力モノハシ。実在する」

彼の言葉に一気に不愉快そうな顔になった小夜啼鳥が即断す  
るもイドが真顔で素早く口を挟んできた。そしてこちらを指差す。

「この男は代々続いた嘘つき村の嘘つき女と嘘つき男の間に生ま  
れたサラブレッド的嘘つきだが今生に一度だけ許された機会を  
用いて真実を語った。以降口にすることすべては嘘だから信じな  
いように」

もう面倒臭くなつてお茶抜きで直接飲んでるブランドーの  
カップを傾けながらトワイライトは険悪に顔をしかめた。

「人の過去勝手に捏造すんな。てめえが大嘘つきだろうが」

イドはしれつとした顔でテーブルの上へ指を動かした。示す先  
には籠に盛られた果物がある。

「人間は皆嘘つきなのだからありとあらゆる世界国州県市町村は  
嘘つき村だと言える。無花果の葉は逆説的に嘘の輪郭を浮かび上  
がらせる機能不全の隠れ蓑だ。それを纏う人間は嘘と真実とそれ

を隠す為のさらなる虚偽をすべて自由に発する上自己欺瞞すら厭  
わない都合の良い生き物だ。私は嘘をついていない」

「屁理屈ババア。人の親のことどーのこーの言うのは最低の悪口  
だぞ陰険ババア。ごちゃごちゃ言つてくださるがおたくが言つて  
んのはお前の母ちゃんデボンと同じレベルのアレだかん臍曲が  
りの言い訳ババア」

「お前にだけは悪口の貴賤を語られる筋合いはない」

「白を黒に鉛を金に灰を金剛石に変えるインチキ女に嘘の都合の  
良し悪しを語られる筋合いもねえよ」

「それらはすべてほぼ同じだろうが。真逆ならばつまり隣り合っ  
ており繋がっているのならば挿げ替えは容易いという話で」

「うっせ黙れ典型的な喋るコミュ障。意味わからん。自分の理屈  
で関連性のあるもんないもん好き勝手こじつけて世の中乱すな。  
そんなんだから友達ひとりもないねーんだよ川原の石の下でも探つ  
て湿ったへんな虫とか採つてろばーか」

「種と意味の関係性についての話と私の交友関係とになんの関連  
もないだろうが!!好き勝手にこじつけて人を貶めるのは貴様の方  
だ!!あと喋るコミュ障というその脾臓のあたりに突き刺さる表現  
控える!!すこしは憚れ!!」

なにか地味にダメージを受けているらしいイドが怒声を上げ  
るのを適当に右から左へ聞き流しもつとなにか追撃しようとしてトワ  
イライトは口を開きかけたが、

「鯨と海豚は同一の生き物よ。成長後の大きさが違うものを別種

として区別しているの。鯨もそう。皆哺乳類」

ふと小夜啼鳥がそんなことを言い出した。種の関連性についての話だろうか。今日はぜひぶん唐突だ。ひよつとすると、イモリとヤモリの違いについて詳しくなかった点についてを取り返そうと思つたのかもしれない。

彼女はいつもの調子でそう空中へ言葉投げ、ん、となにかに氣付いた顔になり、小首を傾けてトワイライトを振り返つた。

「あなたは鯨を知らない？」

それは別に無知を蔑む眼差しではなく、単に浮上した疑問について問うているだけだ。彼は笑つて首を横に振る。

「いや、知つてるさ。博物館にやでかい骨格標本が飾つてあるし、海豚なら湖とか河にいますぜ？南部の塩湖にいるつてのはさすがにどうかと思ふけどね。魚も棲めないところに鯨は無理じゃねえかって。でも根強く目撃談は出るよな」

イドに雑な悪口を言っている間はさもやる気なくがたがた浮かせていた椅子の脚を床につける。テーブルに引つ掛けていた自分の足も床におろして、

「鯨の小さい奴が海豚や鯨さ。もつと言や、海豚つていうのは五メートル以下のやつな。それで九メートルまでのやつが鯨。鯨は歯のあるやつとないやつがいて、海豚と鯨は両方歯がある方」

「……知つてるわ。ひげらかしは半可通だと思われるわよ」

明らかにそこまで知らなかったという顔をして不服げに呟く小夜啼鳥へ、トワイライトは気楽に笑いかけた。

「そりや失礼。ちなみにさ、鯨はなんの仲間だと思う？連中、よく似てるじゃん。仲間外れはかわいそうだからついでに分類してやつてよ。ヒント。野郎にや歯があるね」

少女は無愛想な顔のまましばし黙り込んだ。頭の中でなんらかの判断を下し、やがて慎重に答える。

「……哺乳類よ。鯨の小さいやつ」

にっこりして、トワイライトは言つた。

「やー惜しい。小夜ちゃん、残念でしたー。鯨はもともと、仲間外れなのさ。や、でも鯨一門の輪の中に入れてもらえてきつと野郎も喜んでるぜ」

小夜啼鳥は無然としているがイドが腕組みして頷いている。

「鯨は魚類だ。軟骨魚類なので鯨のような骨格標本は作れない。骨として残るのは顎だけになる。なお鯨どころか二十メートル或いは四十メートルを超えるとも言われる巨大種も存在する。名前はメガロドンといつて」

「いるわけないじゃないそんなの」

「それ今お前が考えた名前だろフカしてんなよ」

長々続きそうな与太話をふたりで白けた目をして遮ると彼女は心外そうにテーブルを叩いた。

「私は真実を語っている！そしてそれは鯨と掛けているのか？」

「あんたじゃないからな。うまいこと言いやがつてみたいいな悔しそうな顔すんなそこで」

またこちらを指差して極めて遺憾だという様子をしているイ

ドに冷たく応じてからトワイライトはカッブの中身に口をつける。その一口で空になったので、何度目かは忘れたがまた瓶から琥珀色の液体を注ぎ直していると、寒い駄洒落を愛する女が膨れっ面でなにかごちゃごちゃ言い出している。聞くとともに耳を傾ける。

「ちなみに海豚とはある物語では一番目に賢い生き物だった。人間はその次だ。そして親切なので世界崩壊の危機が迫った際、人類にも警告したのだが言葉が通じないため凝った曲芸としか受け取られず、彼らの脱出後ほぼすべての人類とともに惑星は爆発し宇宙の塵となった。まあそこから愉快な珍道中が始まるんだが」

「へー。まあ芸人の言うことなんか誰もまともに聞かんからな。まあ機会がありゃあ、海豚の話はよく聞くことにするぜ。一番は誰だったんだ？」

「ベンジーとフランキー」

「誰だそりゃ」

突如出てくる人名に彼が呆れて思わず突つ込むが、イドは平気な顔をして続けるだけだ。この女ツッコミ気質かと思いきや真顔で果てしなくボケるので時々手が回らなくなる。やめてほしい。

「その理屈で言えば鯨は爆弾に似ているな、そういえば」

「毎度ながらなにがなんだか……あ、そうそう」

閃くものがありトワイライトは膝を打った。指を立てて機械よく続ける。

「雪男って生き物もいてさ。そいつはそもそも眉唾もんなんだ

が、ほんととは雪山に出るらしくてよ。でも最近不思議なことにこの近辺でも目撃されてるんだ。局所的にうちの井戸周辺。いつも惜しいところで捕り逃してんだけど今度捕まえてサーカスか新聞屋に売ろうと思ってる。身体と足はでかいが頭は悪いし、バナナで畏でも仕掛けりゃいけると思うんだよね。あ、でも足跡ならあるぜ、今貸し出し中だから、今度見せてやらあ」

小夜啼鳥の方を向いて軽薄に喋りつつ、イドの気配を伺えばかなり憤慨しており今しも反駁してくる様子だ。彼女が攻撃的に息を吸う音さえ聞こえたのだが、その前に小夜啼鳥が冷淡な目をして眩き出した。

「胡椒と芥子の混合物が人体に及ぼす影響……皮膚の炎症、失明、気管支損傷、その他の危険性及び激痛についてと卵になんらかの可能性をあなたは見出す？」

「あつ、それ、よく知ってる。密接な関係があるよね。レポート五十枚書けるくらい知ってるからもういいよその話はやめよう。場合によっちゃあ素直に無実の罪を認める反省文だつて書いちゃうかも shouldn't。それくらいよく知ってるから十分さ」

反射的に尻を浮かせ、だが腰が引けたので背凭れに押し付けられて結果的にはより追い詰められたような心地で彼は素早く応じた。愛想のいい笑顔で小心翼翼として語るも小夜啼鳥は調子を变えない。

「ちなみに一部の赤唐辛子はその形状から猛禽の爪に例えられる」

「やめようよー、という幻聴を聞く。べそべそに泣いており嘆願

する甲高い子供の声。つまり昔の自分の声だった。

「ああ……うん。奴さん、あれが好きだよ。どうかしてると思う。少なくとも屋内で使うべき兵器じゃないし人に向けて投げるべきものじゃないと思う。まあ小夜ちゃん、そんなことよか、これ食わん？梨のコンポートにカスタード合わせたやつなんだけど。割といけるよ。無花果もあるぜ」

少女は汚れた紺色のワンピースを着ていた。髪の色に映えてよく似合っている。綿素材で胸下で切り返すデザイン。胸元にピンタックとくるみ釦、腰には夜空の色をしたリボンがついていた。そのポケットの中につと右手を入れ、中にあるなにかを握り込む。

「数日前この家で使用された爆弾の残りがひとつ、今私のポケットに入っている可能性についてあなたはどの程度だと考える？私が今握っているものを任意のタイミングで取り出しあなたの顔面に投げつけるとしたら、阻止できる可能性はどれくらい？被害の程度は？」

「昨日この地に悲劇を齎したその濃縮還元の地獄について、鼻が面白おかしく語っていたならこの娘も同じことをやってみたいと考えない理由もない。彼がそう思う間に、小夜啼鳥は言葉を重ねる。

「物語の中に拳銃が出てきたら、それは発射されなければいけない。そんな法則もある。それを遵守するなら、爆弾はどうなのかしら？炸裂するべきだと思わない？銃と爆弾は親戚よ。鯨と鮫よりも近くて、似ていると思うわ」

やめてよーなんでこんなことするのー。

脳裏に響く湿っぽさ全開の子供の声について同調してしまいそうになりつつ、それを口走るよりはましなことを言おうと彼は決意した。座り直す。落ち着き払って、膝の間で両手の指先を合合わせた。指の間に区切られたいくつもの三角形、その空間を見据えて静かに話し出す。

「我々全員が得をする……いや、誰も損をしない方法について話そう。君は賢いからそれについても心得てるはずだ。答え合わせを頼みたい。間違いがあれば指摘してくれ」

少女は頭の角度だけで続きを促した。目の端でそれだけ確認し、トワイライトは真顔でゆっくりと語った。

「そんな珍獣はいなかった。俺は昼間から酒を飲むし酔って幻を見たんだ。足跡はただちに破棄するし今後誰かに聞かれたら注目を引きたかっただけの捏造だったと必ず答える。もつとも社会的地位もないし、交友関係も狭く信用のない俺のような人間がどこでなにを語ったところで、常識という物差しから他者がどんな真実を見出すかは簡単に想像できると思う。この方法ならば誰の名誉も傷付かない。誰もなにも失わない。俺には元々名誉なんてない、持っていないものは傷つきようもない。そして爆弾が弾けなければ、誰もが平穏でいられるんだ。なにかもがが無傷だ。卵の殻さえも。君が不愉快に思う必要も、どこにもない。違うかな」

小夜啼鳥は平然としていた。右手は相変わらずポケットの中だ。

「手を触れず爆弾の真偽について見極める方法はあると思う？ふたつはそっくり。傷は見えない場所があると仮定した場合」

「永遠に投げなければいい。見分ける必要はない。卵がひとつ手つかずのまま腐るとしても、そっちの方がいい」

「詭弁 答えになってない。では卵の中には雛が育ちかけていて、早急に母鶏へ戻さないと死ぬとしたらどうする？」

言い淀めば即ち死が訪れる。そんな予感があり悩む暇もなく彼は答えた。

「目に見える場所にあるならいくらでも方法はあるはずだ。そっくりだと言っても中身が違う以上は絶対に見た目も違う。爆弾ならかなりの確率で一度洗ってあるから表面が滑らかだ。そうでなくても、中が違えば光の透過度や反射が違う。完全な闇の中に沈んでいるのではない限り、両者の殻の色や質感は間違いなく異なる。真贋ふたつあるなら確実に見分けられる。やってみせるから用意してくれ。君の課題にはこれで答ええたと思う。問題は現状それがまったく見えないところにあることと、取り出されてもひとつだけで比較できないってことだよ。条件がまるで違う」

不透明なものを口にするときには注意している。例えば牛乳。必ず透明なグラスに注ぎ不透明な器は使わない。慎重に傾けて飲む。なんらかの魔法で、その底に鼻が百足を混入させていないとも限らない。現状はつまりそういうことだった。

「確実な安全を取り、雛になりかけた卵を放置するってことはしないわけ？」

「詭弁は駄目だと言ったのはそっちだ」

試すように口にする小夜啼鳥へ言い返ししながら彼が口を尖らせると、彼女は自然な仕草で目を伏せた。

「確実に捕らえてみせるからまず屏風から虎を出せというのは非常に有名な詭弁よ。まあ……正解。おめでどう。雛は無事母鶏の元へ戻ったわ。あなたは無力な生命をひとつ、救ったことになる」  
ワンピースのポケットから、右手を抜き出す。握っていた手を開いてこちらへと差し向ける。掌には黒いものが載っている。

「ポケットの中に卵大のなにかが増えているのに気付いてたから信憑性が増したんでしょ。目敏いのも考えものね。残念でした。たまには騙されるのも悪くないんじゃない？」

少女の右手が握っていたのは、彼が昔鼻に命じられて湖の底から拾ってきた小石だった。鶏の卵と同じくらいの大きさで、同じくらいの軽さ。ポケットの中に隠されれば見分けるのは困難だ。指摘の通り、鼻の時から帰ってきた際になにか持っているなど思ったのだが、ああして仄めかされれば新鮮な地獄の記憶が危険性についての確からしさを高めた。結果として、これである。愉快だった。

「こんにゃろ」

彼が苦笑交じりに呻くと、小夜啼鳥は得意げな目の色をしてふんと鼻から吐息を漏らした。澄まして念を押す。

「珍獣についての発言はあなたに非があるとして一切取り消すと言質を取ったわよ。それでいいわね？」

「はいはい、そりゃあもう。満場一致さ。なあ、姐さんよ」

イドの方を振り返る。彼女はコンポートを掬つて最後の一口を飲み込んだところだった。頷いている。

「ここに至るまで完全無視と言うか置いてきぼりで若干寂しい思いをしていたが、まあそれなりに面白くないこともなかったかもしれない」

「お前の靴のことで揉めてたんだよ他人事か」

思わず直接的に言い返してしまい、これで今日三回目だと思つたが意外とイドは平気そうな顔をしていた。つまり先程の取り消しが有効でカウントも一回減つたということか。この女は妙なところ律儀である。

怒った声は横合いからかかった。

「反省文書く？それとも殴る？」

「あつ、なんて書けばいいの。何の罪で何枚？すぐやるよ。心を込めて書かせていただきます。とにかくすみませんでした」

にこにこして従順そのものの態度でトワイライトが揉み手すると、向かいのイドがしょうもなさそうに呟いている。

「くだらん男だなあお前」

「うるせえお前は黙つてろちくしょう」

素早く顔をしかめてそちらへと言い返している間に小夜啼鳥は溜息ひとつついて、石をポケットに戻しスプーンを手を取った。梟のところでもおそろしくなにか食べてきたはずだがまだまだ食べる気がしなかった。健啖でなによりだった。

梟はまだ二階から降りてこない。いつの間にか上が静かになつたので、窓から出て行つた可能性すらある。まあ自由にさせておこうと考えてトワイライトは適宜お茶汲みに務めた。

彼女の手相はどうだったかと彼が何の気なしに尋ねたとき、子供のお守りでうんざりした、とだけ小夜啼鳥は答えた。相変わらずつまらなそうな顔をしていた。

質問屋の小鳥はその後、従兄弟の妻とはなんというのか、とイドに聞き、彼女はそれも従姉妹だと答えた。小夜啼鳥は無言で頷いて、納得したらしかった。世界は知られざる関係性に満ちている。そのつんと澄ました横顔は、どこか満足げに見えた。